



## 木もれびの森の野鳥たち

1月

< 早くから姿を見せた冬鳥たちは・・・ >

昨年とはとても少なかった冬鳥たちの飛来は、この冬はどんな様子だったのでしょうか。10月下旬、まずジョウビタキがやってきました。11月初旬には、数が少なかったシメ・シロハラ、そして飛来が遅かったツグミも姿を見せました。

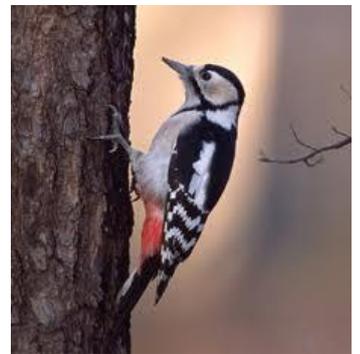
下旬には、1、2月並の寒い日が続き、あちこちで雪の便りも届きました。その影響か、山からヒガラやキクイタダキ・ルリビタキが食べ物を求めて下りてきました。例年より1ヶ月あまり早い飛来でした。

ムクノキやエノキの実のレストランは、ヒヨドリが群がり、その合間をぬってシメやツグミたちが実をついばんでいました。12月下旬には、木の枝に残っていた実もほとんど食べつくされてしまい、後は地面に落ちた実が瀬りとなります。

主に虫食のキツツキの仲間、コゲラやアオゲラは木を叩いて虫の居場所を探り当てるようです。コゲラはバのようにくちばしで赤松の木の皮に潜んでいる越冬中の虫を取り出していました。久しぶりに姿を見せたアカゲラは、古木でコンコン虫探し。そこへひと回り大きなアオゲラが飛んできて、「この辺りは私のなわばり！」といわんばかりにアカゲラを追い払ってしまいました。

シジュウカラも落ち葉の下のさなぎを見つけ出し、枝に戻って食事にありつきました。針葉樹の林を好むヒガラやキクイタダキは、高い枝先で虫の卵などを探してクルクルと忙しく飛びまわっていました。

野鳥たちにとって、1、2月は1年で一番食べ物が少なくなる季節。例年、地面にたくさん落ちているミズキの実も不作で、木の実食の鳥たちにとっては厳しい越冬となりそうです。(瀬尾)



アカゲラ

## こもれびの森の樹木 (23)

こもれびの森の活動地Aの一部に手入れされていない藪の状態のままのエリアがあります。活動地Aの1・2区の植生調査地区に隣接する3・4区です。手入れしない理由は野鳥のためです。ここは西方に道路を隔ててゴルフ場があり、繋げる形で茂みを残し、野鳥の通り道としました。

このエリアの樹木の現状を2011年11月、12月に調査しました。その概略を報告します。

高木は3区111本4区139本、計250本、低木は3区315本4区395本、計700本植生しています。

高木では多い順にイヌシデ65本、ミズキ56本、コナラ34本、ウワミズザクラ25本、コブシ18本、エゴノキ14本、イヌザクラ11本の順でケヤキ、スギ、ヤマザクラ、クマノミズキ、エノキ等15種類あります。

低木はムラサキシキブが250本で最も多く次いでコゴメウツギ40本、ガマズミ39本、ニシキギ36本、トウネズミモチ34本、マユミ31本、ゴンズイ30本、ムクノキ30本、アオキ26本、シロダモ25本、ツルグミ16本、サンショウ14本、ヤマコウバシ13本、シュロ11本、イヌツゲ10本、コウゾ10本のほか、ウグイスカグラ、ツゲ、ヤブムラサキ、ネズミモチ、カマツカ、タブノキ、ツリバナ、チャノキ、アカメガシワ、イヌザンショウ、ヤツデ、ハリギリ、サネカズラ、ナワシログミ、サワフタギ等42種類植生しています。

低木についてはこもれびの森の樹木第8号で一部取り上げましたが今回はニシキギとアオキです。

**ニシキギ** (ニシキギ科ニシキギ属)、花期は5～6月に黄緑色の小さな花がまとまってつきます。実は10,11月に赤橙色に熟すと裂け種子が頭を出します。秋の紅葉が美しく、錦織に見



ニシキギ



アオキ

るところから名前の由来がきています。

**アオキ**（ミズキ科アオキ属）は常緑低木、日陰に強い陰樹で針葉樹の森などで手入れしないと繁茂します。実は長楕円形で12月から翌年5月に赤く熟します。枝が青く、葉が一年中常緑なことから名前の由来があります。（林）

### 木もれびの森のつる植物 (5)

木もれびの森ではたくさんのつる性植物を見ることができますが、なかには見分け方の難しい似たものもあります。今回は「似て非なるもの」という視点で、草本類と木本類それぞれひと組ずつ取り上げて見ました。

#### アマチャヅル（ウリ科）とヤブガラシ（ブドウ科）

アマチャヅルは朝鮮ニンジンと同じ薬効成分が含まれているといわれ、大ブームになったことがある植物です。ヤブガラシは前回掲載のとおりです。どちらも巻きひげタイプのつる性植物で、葉は鳥足状複葉（小葉5枚が基本）でよく似ています（写真1、2）。

花や実の時期ならば科が異なるため容易に見分けられますが、それ以外の時期は見分けにくいと思います。見分け方としては、「葉の表面にざらざらした毛が生えていて葉を噛んだときに甘みを感じられるほうがアマチャヅル」などといった方法があります。最も確実な方法は「巻きひげの出ている位置」を比較することです。アマチャヅルの巻きひげは葉腋（葉と茎の間）から出ているのに対し、ヤブガラシの巻きひげは葉と対生になっています（写真3、4）。

#### ツタ（ブドウ科）とツタウルシ（ウルシ科）

右の写真（写真5）は、杉の木の幹をつたっていくつる性植物の様子を写したのですが、2種類が混生していることがわかるでしょうか？巻きひげの先端が吸盤状になっていて表面がつるつるの垂直な壁でさえもつたっていけるツタと、（人の体質によっては）かぶれを引き起こさせる成分を多く含むとされるツタウルシの2種類が混生しています。成木同士であれば葉の形がはっきりと異なるため見分けるのは容易です。ツタは先端が3裂の単葉で葉柄が長く鋸歯がある（写真6）、のに対してツタウルシの方は3出複葉で鋸歯がありません（写真7）。

問題は若木の時期にあります。ツタの若木の葉は成木の葉と異なり3出複葉となることが度々あります。一方でツタウルシの若木の葉には成木の葉にはない鋸歯があるものが多くなります。つまり「若木の葉は双方ともに3出複葉で鋸歯がある」ということになり（写真8、9）、見分けるのがかなり難しくなります。見分けるポイントはツタの巻きひげとツタウルシの気根の比較です。ツタのつるから出る巻きひげの先端は吸盤状になっている（写真10）のに対し、ツタウルシのつるから出る気根は先端が細いままで

です。（写真11）ただしかぶれやすい体質の人は、直接触らなくてもそばを通っただけでかぶれてしまうらしいのであやしいときは近づかない方が無難です。木もれびの森にはツタウルシは局地的に少しあるだけで、散策路を外れなければ出会うことはまずありません。（大川）



1.アマチャヅル葉



2.ヤブガラシ葉



3.アマチャヅル  
巻きひげ



4.ヤブガラシ  
巻きひげ



5.ツタとツタウルシ



6.ツタ成木葉



7.ツタウルシ成木葉



8.ツタ若木葉



9.ツタウルシ若木葉



10.ツタ巻きひげの吸盤



11.ツタウルシ気根